
未定一。

国士無双

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未定一。

【Zコード】

N7761M

【作者名】

國士無双

【あらすじ】

間抜けな主人公が酷い目に遭つお話。

キャラ詳細

きりゅう・かえで
桐生鶏冠井

- ・英語、数学A、社会A、国語Aが赤点。
- ・チョコ口口口ネ患者。

- ・阿呆。
- ・妹と2人暮らし。
- ・手先が不器用。

・男。

- ・割と良い雰囲気を出している。その為、友達ができやすい。しかし3日以上友達でいると本性がばれ、友達を失う。

・目立ちたがり屋 鶏冠井 普通

- ・B型
- ・高2。
- ・グッピーを5匹飼っている。
- ・もやしつ子。
- ・お宝は金庫の中。

きりゅう・みく
桐生未来

- ・鶏冠井の妹。
- ・テストは9割打者。
- ・不都合があると黒くなる。
- ・1日1通はラブレターが。
- ・女
- ・高1。

・裏で何か仕事をしている……らしい。

・ピンクの髪の毛。

・部屋も真っピンク。

・母親と父親を恨んでいる。

・O型。

・結衣を「お姉ちゃん」と読んでいる。

森永結衣
もりなが・ゆい

・鶏冠井の幼馴染み。

・男口調。

・ぺったんこ。

・飽きっぽい性格。

・バイト経験120回。

・結構万能（料理以外は）。

・楽器全般OK。

・父親単身赴任。

・たまに旅に出る。

・ショートカットの茶髪。

牟田聰久
むた・あきひさ

・鶏冠井の幼馴染み。

・伊達眼鏡。

・ツツコミ苦手。

・ボケ苦手。

・それなりに真面目。

・ムツツリ。

・家にはデスクトップパソコン3台装備。

・小企業の経営者。

朝里佳奈
あさと・かな

- ・パン売ってる。
- ・好きなパンはメロンパン。

桜井遙
さくらい・はるか

- ・鶏冠井等の担任。
- ・まだ20代前半。
- ・未婚。
- ・機械音痴。
- ・ポルシェに乗ってる。

プロローグ

「……ちやん、お兄ちゃんー遅刻しちゃつたよー。」

「んあ……」

寝ぼけ眼で時計を見る。

短針が8、長針が3を指している。

つまり、8時15分。

「まずい！何でこんな時間にー。」

ふと部屋を見渡すと、点けっぱなしのテレビとPC。

俺が居るのは、ベッドではなく、座布団の上。

大方理解できた。

昨夜、徹ゲーをしていたところ、急に眠くなり、そのままパタリ。

「遅刻だあああああーちょ、未来！着替えるから出るー。」

慌てる未来を押し出し、力強くドアをしめる。

急いで干してあるカッターシャツを奪り、ネクタイを通す。

こういう時に限って、なかなか輪つかが作れない。

普段なら絶対10秒以内にやつてるのに！

……いや、15秒？

ええい！そんなことはじつでもいいのだよワトソン君！

無駄な思考が一番時間を食うんだよー。

え？急がば回れ？

うつせりー。じーを回れつていいんだよー。

部屋？

回れねえよ！

くつそーこんなネクタイ、じーでもなれえ！

- 3分後 -

「お兄ちゃん…キューートなアクセサリーだね…」

「気休めは止せ妹よ。これの何処がキューートだつてんだ」

「ほら…団子つてところが現代つ子つぱくていいじゃん…あ、チャイナか」

「それは団子ヘアだらおおお！俺のは首からぶらさがつてんの！見てみ！？これ！」

「…激しく鬱陶しいよお兄ちゃん…」

「す、すまん。熱くなりすぎた…」

「どんだけ不器用なの…貸して」

「おう！？」

グイッとタイを思い切り引つ張られて首が締まる。

このネクタイ。団子結びになつてるくせに、何で滑るんだよ！腹立つ！

「……これで良しと」

「すまん…。でもお前、もう遅刻確定だぜ？」

「あ…」

「いやあ、とんだ災難だつたな。でも俺はこんな良い妹を持ってて幸せだな…あ？」

「うつさいバカ兄貴！お前エのせいで遅刻だらつが…単位落ちたらどうすんだよ！あ？言つてみ？」「リハ」

「……不甲斐ない兄で申し訳ござりん。この件については切腹するしか…」

「だあああ！うつせえ！死ね！死ね！消え失せり…一度と現れんな！」

ドガツ！ドガツ！

腹、顔面、肩、尻。

色々な所に蹴りが入る。

はあ、ヒールじゃなくてよかつたあ…。

どりやらウチの妹、不都合があると黒くなるみたいですね。

いや、オーラが。

田元じゃなくて。

田元が黒くなるのは、俺。

殴られたアザだつたり、恐怖に伴う寝不足だつたり。

いかんせんダメ男です。

「うおう、凄えな、お前の顔」

「いろいろあつてな…。恐妻ならぬ恐妹だよ」

こちらは親友Aこと森永結衣。

女のくせに、男言葉で話す、色気とはかけ離れた人間である。

「今もの凄く失礼なこと考えなかつたか?」

「お、察しがいいねえ。何? 今調子いいの?」

「何がだよ! つか何? 殴られたの?」

「そんな甘つちよろいもんじゃねえ。首縊められて恐喝、蹴り入れられて今に至るつて所かな…」

「壮絶な…戦い?」

「一方的な。背水の陣でも敵わねえよ」

「大変だな…」

「お前はバイト続いてんの?」

「いっ確か…ローンでバイトしてたよつた気がするんだが…」

その前がPIZAHTの配達員で、STARBAKS COFFEEの従業員…

「からつきしだよ。この前、密がエッヂ本買つてて、防衛本能で殴つちやつて…」

「お前、コンビニで働くな。今後一切。路上ライブでもやつて駄賃集めてる」

「いや……それがさ、全然集まらねえんだよ」

「何！ もうやつちゃつたカソジ！ ？」

「ギター・ケース前に置いてんだけだ、コレ投げ込んでくれる奴少ねえんだよ」

「コレだよコレとか言いながら人差し指と親指で丸をつくなっている。へえ、何それ、仏様の真似？」

「それも100円とか500円でさあ。千円ぐらいいぐれって話なんだよ。ギターの整備費の方が高くなっちゃって、大赤字だ」

「で、辞めたのか」

「察しの通り」

「長続きしねえな。ギターにハマつたり……そうだ、お前、一回だけ会社立ち上げようとしたよな？」

「懐かしいな。あの頃ははつちけたもんだ」

「いや、半年前な……」

「外資系の会社を立ち上げようとして、家の口座から全額下ろしたときには、酷く怒られたからな。懲りたよ」

「金を下ろしたお前が悪い」

「一時のテンションに身を任せると大変なことになるぜ！」

「わー、すごいせつとくりよーーー！」

「……日本銀行に勤めてみたい。あと、ヨーグルト食べたい。B.I.Oチャレンジしたい」

「脈絡無いにも程があるよー。日銀はわかるけどヨーグルトはわからーん」

「もうすぐ進路希望提出かあ。鶏冠井は何って書くんだ？」

「一応、進学。高卒で就職はキツいかなって」

「利口だねえ。あたしは一生バイト＆パート＆パート生活でいいよ

「泥沼生活キタ！ いいのそれで！ 人生棒に振るよーーー！」

「だつてあたしが大学進学なんて考えられるか？ この高校入れたのだつて奇跡の中の奇跡なんだから」

……確かにそうだ。

結衣の中学校の頃の成績はオール3。

んでもってテストの平均点は250点。

また奇跡が起きない限り、大学校進学は到底無理だろう。

神様もそこまで暇じやないだろうし。

「そうだな。諦めろ。お前の人生はそれでいいんだ。お前らしく生きれば、それで」

「あたしが二ートだと言いたいのか?」

「そういう意味じゃないんだが……」

「ならいいけど……。鶏冠井はどこの大学に?」

「決めてない。地元でもいいし」

「ふうん。じゃ、飯食つてくるか。じやな」

「俺も飯食うかな……」

「……バカな… チョコロロネが無い… だと?」

昼休み、購買近くのパン売り場にて。

250円を握り締めてパンを買いに向かつた。

希望はチョコロロネとコーヒー牛乳。

しかし、チョコロロネが売り切れだつた。

「あのチョコレートとパンの絡みが最高で、さらにコーヒー牛乳と混ざり合つことでサッパリとした味わいに!俺はこれ以上何を求めるべいいんだ!」

「いや、意味分からぬから。代わりにこれでも買って行きなさい。明日はもつと早く来ることね」

はい、と言つて渡された、

メロンパン。

チョコレートメロンパン。

「チョコレートの体積は少ないけどメロンの風味が追加されたよ。じゃ、毎度あり~」

半ば強引にチョコレートメロンパンとコーヒー牛乳を渡され、手に握つた250円を全て持つてかれ。あれ?お釣り出ないの?

「俺:メロン嫌いなんだよ……」

西瓜も嫌いだ。

カブトムシみたいな味がする。

「おー、今日はメロンパンか。珍しいな

「よ、聰^{あき}久^{ひさ}。このパンはな…パン売つてた超自己中女に押し売られただ…。クーリングオフつて有効かな?」

「無理があるだろ…」

「じゃ、お前のそなきび団子と俺のこのメロンパンを交換しようぜ。」

してくれたらお供になつてやつてもいいぜ?」

「別に良いけど…」

「……やつぱお前、シシ ロリのヤンスないな。普通今は『ビビ』の昔話だよー。しかもきび団子なんて何処に……何で、こんなとこりんにきび団子が…これが活字の力か…』とシシ ロリ + ボケも形成できる最高のフリだつたはずだぜ!…?」

「お前のテンションには着いていけねえよ…昔から

「幼馴染に言われると思わなかつた台詞だよ。ナツイツキだぜ? 淀腺決壊あと10秒?」

「疑問詞にしても俺にはわかんねえ。で、メロンパンを食つてほしいとの事だな?」

「概ねそんな感じかな?」

「食つてはやるけど、代わりには何もやれねえぞ?」

「それでも構わん。有難な

「じゃ、行け」

「……?」

飽きられたか、愛想尽かされたか、嫌われたか。

こいつに嫌われたら俺の友達は水槽の中のグッピー5匹しか居なくなつちやう。

最悪でもそれは防ぎたい。

「あー、腹減つたな…」

「それでも食つとけよ」

彼が指差した先には、『三箱。

……これは手遅れだな。

「鶏冠井…凄く頬痩けてるな…」

「ああ、一食でも抜くと「うなつちやうんだ…。小さい頃、聰久に

『何それキモツ…』と罵られていたさ」

「……可哀想な体」

「……お前もな…」

「顔を上げろ、歯ア食いしばれ」

「そういう所も含めて残念だよ」

「この性格は治らないからな。どうしてあたしは男言葉なんだろつか」

「精神科医に聞け。でもそういう所から来るんじゃないか?発達の遅さとか」

「何でこんなに鶏冠井を殴りたいんだろうか」

「精神科医に聞け。でもそういう所から来るんじゃないか?発達の遅さとか」

「何で鶏冠井は学習しないんだろうか」

「精神科医に聞け。でもそういう所から来るんじゃないか?発達の遅さとか」

「死ねえええええええええええええええええええええええええええ！」

「ぐほつ…」

あ、マジ苦しい…

よりによつて鳩尾深くに入れてきやがつた！それも捻りを加えて！あ…意識が…

パタリ。

K・O・

一章 ～翌朝にかけて

放課後。

俺が目を覚ましたのは、保健室だつた。

……まだ鳩尾みぞおちが痛い……。

腹殴ると胃の機能が低下するんだぞ。

しかしここはワザと大袈裟に演技するか……。

「痛う……」りや重傷だな……」

……

馬鹿な……

誰もいない……だと……？

てつきり結衣がそばで「大丈夫！？鶏冠井！」みたいな心情で待つ
てくれてると思ったのに！

これじや、骨折り損のくたびれ儲けじやねえか！
いや、骨は折ってないぜ？鳩尾だぜ？

……帰る。go to 職員室？

帰ろつと

「うおおおおお！」

「うわっ！腹模様が…」

「てめえ…下剤入れやがったな…」

「ケツ！莫迦兄貴が…」

「ふざ…けんなよ…。一回に一度倒れてたまるかあ…」

「バカな！兄貴が立つた！」

「おら！お前も食え！」

「み、未来の分は下に用意してあるから…じゃあね…畜生…」

トイレ行きで…

—翌朝—

「疲れねえ…」

昨夜から今朝にかけて腹が「ギュルルルルルル…」と悲鳴を上げていたから、田が覚めてしまった。

これも全部、あの憎き妹のせいだ。

呪つてやる…

そうだ。

折角早く起きたんだから、早く着替えて出よう。

…あれ？

このネクタイ…つかしいな、通らねえぞ？

最近不調だな…

うつぜえ…もうこ…ありのままの俺で行く！

「き、今日はキュートなアクセサリーだな鶏冠井」

「どこら辺？」

「そのネクタイとか目元のメイクとかさ…」

「目元描いてねえよ！しかもネクタイは違

だ
！
』

「その因子、あたしは可憐だと思ひません」

一 気休めはよせなあ……」」のせうどりも飽きたし……」

「じゃ、テスト勉強はしてきたか?」

「せならせ」とイシれよおお！俺が不懶じゃね！か！」

どせなんだよ…お前のシンテレは理解じに

今すぐ明鏡国語辞典で

「同じ持つべきものも普通は新明解か云辯覆さる

「思ひ出され」

「ダメだ 突つ入む氣力が湧かなー

お腹痛い

「つか、何でお前はこんな朝早くから来てんだよ」

「ん？ 朝練。陸上の」

「お前、陸上してたんだな」

「まあ、暇つぶしつてのもあるけどな。こつも朝5…00には田、

覚めちまつ」

「おばあちゃんか！…でも、そんなに走るから胸が固くなつて脇
らまねえんだな」

「うつせえー走ると胸とでは関連性がちつとも見つかんねよー。」

「（。 。 ） プツ」

「何だその笑いは？」

「いや、必死だなと思つて」

「後で絶対殺す……」

「予習でもしとくか…あ、早くしないと始まるぞ？」

「分かつてるよーじやあなー。」

ガシャン！

勢いよく扉が閉まつた。

さて、本当に何をしようか。

＊。＊。＊。（、 、 、 ）＊。＊。＊。

「何で俺が…お前の…手伝いをせにゃ…ならんのだ…」

「いーじやんじーじやん、そうカツカしないでよー」

「するわーー」の比率を見ろよー8：2だぞーもつくなざつだよー。」

「（。 。 ） ーー。」

「ー？」

「親友にそんなこと言われるなんて…ショック極まりないわ…」

「だつて、これ、お前に課せられた任務だろーー？」

「重すぎるんだもん…」

「腹立つ…」の紙束の代わりにお前をシユレッダーにかけてやるつ
か？ そうだ。それがいい。まだメロンパンの借りを返してないしな
あ？」

「そ、その件に関しては50円返したじゃん… チヤラにしてくれな
いのーー？」

「どつちにしる、今新たに貸し借りが作られたからな？」

「私、多分シユレッダーに頭入らないよ？」

「冗談通じねえのかよ… ジヤ、この貸しはいつか返してもうつから

「うひ… 酷い…」

「一応最後まで手伝うけど」

「……お願いします」

ふつ…

女の子株が大幅下落しましたか。

。 * 。 * 。 (、 、 、) * 。 * 。 *

キーンゴーンカーンゴーン…

終業を告げるチャイムが学校中に鳴り響く。
肩の荷が降りたかのように、気が抜ける。
やつと今週が終わり、休日に突入する。
今週は疲れた。

「すいません」

……誰？

おモ、誰？

つか、クラスに居たつけこんな奴。

「失礼ですが、誰でしょつか？」

「あ、1年3組の鞍馬杏里といいます。あの、少しお時間よひしご
でしようか」

「ここにナビ……」

。 * 。 * 。 (— — —) * 。 * 。 *

「何の話？」

連れてこられたのは、校舎裏。

西日が横顔に当たる。

シチュエーション的には、告白？

いやまた。こんな子会つたことないぞ？

もし告白されるのなら…断るか？

いやいやいや。

願つてもないチャンスだ。

ここには…

「あの、実は私…ずっと前から…」

よし来い！

「本当に頭から触覚が生えてるのか気になつてたんです…！」

「……どこの世界の常識？」

「前に未来ちゃんから教えてもらつて、ずっと気になつてたんです

！」

あいつ…

こんな純情無垢な子にまで吹き込んでやがつたのか…

「他には何を吹き込まれたの？」

「ええつと…本当は緑色だとか、3m以内に近付くと子供が出来るとか、変態が空気感染するとか、あとは…」

「全部忘れなさいー今すぐ！」

「ええ！？待つてくださいー前頭前野の部分から削除していきますので！」

「残念ー前頭葉に記憶は存在しないー」

「ええ！本当ですかー」

「一喜一憂はいいからー…もうこによ…絶対俺の体力が最初に無

くなるから……」「

「で、結局の所、触覚は生えてないんですね?」

「俺は君と同じだよ……」「

「そうですか。でも、私と一緒にすることは、×××も生えてないんですね。一応『触覚』つてことで

こいつ……

全然、純情無垢なんかじゃねえ!

下手したら俺が負ける!

「じゃ、俺は帰るから

「さよならー」

追い討ちをかけるとは……

神様もなかなかやるじゃねえか。

今夜は未来をボコるしかねえな……

四章 ～深夜～

「昼間の……真相を聞いてみるか……」

コンコン……

……ありや？

無反応。

「おーい、未来ー？居ないのか？」

……無反応。

「入るぞ？」

ガチャ。

……やはり不在。

ん～、靴はあるし……

まあいいや。

テレビ見よ。

。 * 。 * 。 (、 、 ;) * 。 * 。 *

ギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ。

ガチャ。

力チャ力チャ。

……泥棒？

深夜を狙つた空き巣か？

でも、何故に鍵を？

行ってみりや早いか。

「あの～、すいません。鍵はどこに……」

未来？

「……」

「その旅行鞄は、何なんだい？」

「も、文字通り、旅行だけじ？」

「声が上擦つてるぜ？吐いちまえよ」

「旅行だつてば」

「旅行帰りにそのマイクか… そのイヤリングじやあ飛行機通らな
いよなあ」

「や、夜行バスだから…」

「つかさあ、突つ込もつと思つてたんだけど、出たの夕方じやね？」

「……だつた？」

「だつた」

「だつたつた？」

「だつたつたつたつたつ…」

「せい！シツコイ！お前そんなキヤラジやねえだろー・どんだけ追い
込まれてんだよー！」

「あうううう… 分かりましたよー！白状しますよー！」

「長かつた…」

「モデルしてますよー！撮影帰りですよー！」

「その心は？」

「金だよ！世の中金が全てなんだよ！」

「ウチの妹があああ！健気なお前は何処行つた！いや、お前が健気
だつたことなんて一度も無いんだなあ」

「でも、稼いだ金は全て貯金してあるから…」

「健気だつた！いや、健気なのか？」

「取り敢えず、ママ達には内緒の方向で…」

「いや、俺母さんの携帯番号知らんじ

「私もだけど？」

「……」「……」「……」

「バカ親共が……泣けてくるな…。そつか。ありがとうな、未来」

「そつだ…私は生活費を確保するためにモーテルの仕事を…。…どん
なモーテルだよおおお！つか、お前、只のヒモじやねえか！」

「兄貴からお前にまで成り下がった俺の二人称！そして夫婦関係は
育んでないから多分ヒモじやない多分…いや、もしかしたらもしか
！」

「はあ…はあ…。仕事で疲れてるんだから…はあ…大声出させない
でよ…はあ…」

「…残念ながら俺もだ…。じゃ、ドローツヒトド…」

やつと終わつた…

…待て。

何だこの勝負は。

「隙ありつ！」

「ふお！」

「チツ…外したか！」

「性質悪いんだよこの生娘が！そしてヒールはやめろ…」

「黙らんかいムサ男！」

「黙らんわい！お前が話を展開させるから『会話が多い』とかクレ
ームが来てるんだろ！」

「作者に言え！どうせ私達は作者の手の平で踊らされている操り人
形に過ぎないんだからさ…」

「それは言わないつていう約束だら…つ…一次元の宿命かなかな」

「うう…涙出てきた…」

「よし、いつまでも玄関に居ちゃ いけねえから、中入れ

「あ、お邪魔します」

「思つたんだけどさあ、お前、キャラがブレてるよな。最初の頃は

『お兄ちゃん！起きて！遅刻しちゃうよー』とか言つてたのにな

「正確には『…ちゃん、お兄ちゃん！遅刻しちゃうよー』だけどね

「記憶力の次元が違います…」

「ブリつ子キャラとか疲れちやつたし

』

「やれりつと思えればわかるのか？」

「ん？まあ……」

「やつてみてくれよ」

「いいけど……」

「じゃあ、三一イ、スタートー！」

「…………？」

「いや、何か振つてくれないと」

「あ、そうか。じゃあ、明日の朝飯、何が食べたい？」

「えー？ にいにの作つてくれたご飯だつたら何でも美味しいから、何でもいいよお」

「…………オエ…………おつと、いや、すまん。胃液が食道に逆流しがけただけだ。口からレインボーになることは無い」

「でしょ！？ そうなるでしょ！？」

「未来、俺が悪かった。土下座する。だがしかしブリッ子は金輪際やめてくれ

「それだけ平謝られると悲しいんだけど……」

「うん、お前はそのままが一番いいよ」

「ど、どつも……」

「よし、俺は寝る。じゃあな」

「あ、おやすみ」

。 * 。 * 。 (30 分後) * 。 * 。 *

「魔うなされて眠れなかつた……」

「何に？」

「ブリッ子状態のお前がメイド服着て迫つてくる夢

「腹立つけど、リアルに大丈夫？」

「枕が汗と涙でビショビショだ」

「ボカリでも飲んだら？」

「いや、ポカリはやめておこう。必要以上に糖分を摂取することになるからな。ポカリならアクエリのビタミンガードの方がいい。しかし、糖分量にさほど変わりはないから自分で作った方がいいな。材料は水と砂糖、塩、ハチミツ、梅干し。一番シンプルで体にいい。なるべく砂糖は少なめにな。まず、水を温めて砂糖と塩を加える。次に梅干しを細かくして入れる。最後にハチミツ。水の量はコップ一杯分くらい。次はもっと簡単な方法。先ほど伝えた方法では残念ながら不味い。だから別パターンをお教えしよう。温めた番茶を用意する。その中にすり下ろした生姜を少し加え、種を抜いて細かくした梅干しを入れる。混ぜる。飲む。正確なレシピが知りたい人はググれ！ここまで聞いて分かつた人もいるだろうが、梅干しは必須だ。塩分やクエン酸、アミノ酸が手軽に手に入り、その他栄養分も豊富だからな。分かつたかな？よし、それじゃ、Let's go！」

「長えよファツキン野郎！」

「俺は文字数稼ぐ為なら何でもするぜ？」

「黙れよおおお！早く寝ろ！」

「お兄様を足蹴にするとはいひ度胸じやないか」

「えー？ミクがいつにいにをあしげにしたつていうの？ひどいよー、にいにのばか」

「ぐはッ！すまん！俺がわるかつた！許せー！」

「分かつたならいいんだよ」

「分かつたついでにもう一つ。未来、西の空を見る。朝日が見えるぞ」

「残念。東だなー。つてマジですか！」

「マジですよ！世間は徹夜で兄弟喧嘩をするのかいー！？」

「いや、多分しない…」

「ギネスに登録しようかな？」

「いや、多分しない…」

「おっぱい」

「死ねよおおおお！」

「ちょ、一次休戦！一回寝よつぱー。」

「確かに……それは正論……」

「じゃ、good night」

「むしろgood morning」

「もうおはようございます」

「多分」

「寝れねえか

「絶対」

「遅刻は嫌だもんな」

「絶対」

「今、4：56だけど、飯の準備始めるか

。 * 。 * 。 (、 、 、 ;) * 。 * 。 *

「時間があると凝つちまつな

「これ、全部食べる気？」

「無論、無理」

「無論じやねえじやん」

「何これ。誕生日パーティーか何か？」

「いや、一般家庭の朝食」

「やつちまつた…」

「余つたら捨てる？」

「それはダメだ。消費者庁に怒られる」

「消費者庁、そんなことしてねえから」

「国土交通相？」

「飽きたから、それ

「ま、食つちまおうぜ」

「それにしても…皿がヤバいほど多いんですけど…」

「捌ききれねえな…」

「ちょっと、時計見て」

「……………急に現実味を帯びてきたな……」

「着替えないとマズい？」

「120%だな」

「「急げっ！」」

…

「こんの…バカ共が…」

「いや…あなたの『凝り性』といつ性格を正せば何とかなつたはず
だけど…」

「仕方ないだろ、時間に余裕があり過ぎたんだから」

「結果このザマですか」

「すいません。内の兄が…」

「黙れ。うん、黙れよ」

「…そうだ。お前、儲けた金は振り込んでるって言ったよな
「うん」

「じゃあ、引き出したことは?」

「そういえば、無い」

「暗証番号は?」

「知らない」

「…マジかよ」

「振り込んだお金は?」

「下手をすればバカ親共が勝手に使つてゐる可能性も…」

「…警察呼ぶ?」

「止めとこうぜ。その代わり、未来。俺にいい方法がある。土曜日
開いてるか?」

。 * 。 * 。 (、 、 、 ;) * 。 * 。 *

「これのど」がいい方法なのよ…」

「あ、もう、バツカ! 関係ないこと話しかけんな! 番号忘れたじゃ
ねえか!」

「し、知らないわよ…」

「やり直すの面倒くせーーーもうこいじやん、迷宮入りで」

「私は別にいいけど」

「へ？ いいの？」

「お金なら簡単に手に入るし。水着に着替えるだけで金が手に入るつてどれだけよ」

「俺の苦労を返せ…」

「あんたが勝手に始めたんじゃない。知らないわよ
「はあ？ そりやねえって……」

『銀行強盗だ！ 誰か捕まえてくれ…』

「……行くべきかな？ これは」

「うん。 逝つてらつしゃい。 健闘を祈るわ
「誰だよお前！ ちよつ、敬礼やめれ！」

『あああ… お金が… お金があ…』

「早く逝け！」

「チークシヨオオオ！ 俺はいつまで妹の尻にしかれてりやいいんだ
よおおお…」

「邪魔だボウズ…ビケ！」

「アアン」

「全く役に立つてないじゃない！ もう…」

「へへ… お嬢ちゃん、やるデュオオオオオオオオ…！？」

「… 未来よ、一応聞くが、それはナンですか？」

「護身用のスタンガン。初めて役に立つたわ

「お前誰だよ… てか、違法じゃないの…」

「高校一年生が知らないなら私がしるわけないじゃない
「よし。帰るか…」

「…」の屍はどう処分するのよ

「銀行員にまかしとけばいいんじゃない？」

「責任感が微塵も感じられない…やつたの私だけぞ」「じや、レッツゴーホーム！」

。*。*。(*、*、*)*。*。*。

「暑い…ヒアコン壊れたか?」

「……もう喋りたくない…」

「電気会社に入れてみるか」

「そうして…」

「ケータイお前の後ろあるから取つて。卓袱台が邪魔で取れない…」

「ふぬおおおおお…」

「手、大丈夫か?ピクピクいつてるけど」

「もう無理…多分吊る…」

「じゃあ動けよ」

「暑いからイヤだ」

「我僕^{わがままで}ガールめ…略して我禍^{わがまが}ールめ…」

「禍つてどういう意味だコラ」

「いいからケータイ取つてくれよ…動いてんじやん」

「面倒…アイス取つてくる…」

「付き合つとれんわ。どう…」

「ちょっと、邪魔しないでよ…」

「フフフ…台所に行くのは俺を倒してからにするんだな…」

「死ねオラ！」

「ぬぐふう…股間を蹴り上げるのは止めり…お腹に響くんだぞ…」

「甘いんだよお前は…出直してきな」

「それは…反則だ…」

「あー、涼しい」

「この野郎…屍と化した俺の前で堂々とアイスを食べやがつて…泣くぞ…」

「あ、電気会社に電話した?」

「返事が無い。只の屍のようだ」

「ん……」

「ちょ、口からバニラ零れてるって、垂れてる！俺の田に入る！望んでないのに白い涙が！分かつた！電話するから！本当に屍死累々になる前に！」

「何人死ぬのよ……」

「よつこらせ……」

『「プルルル…プルルル…ガチャ』

「あ、もしもし。エアコンの修理を依頼したいんですけど…あ、そうですか、はい。いや、バスケがしたいです」

『「ガチャ』

「どうだつた？」

「予約がいつぱいで3日後じゃないと無理だそつだ」

「はうううう…暑さで溶けちゃう…」

「脳？」

「黙れバカ虫」

「虫だつて苦労してるんだぞ！食物連鎖で上位にいる人間には分か

らないんだよ！最高位は多分姑。じゅうとう嫁を食い散らかす的な？」

「姑より鱈の方が強いと思うけど？」

『「渢は脳液」』

「何だその奇妙な歌は……」

「それにしても暑いな…やっぱ冷夏がいい

「でも稻が育たないからね。冷夏は」

「！」

「え？何？」

「お前の口から他者を心配する言葉が出るとは…。只の高飛車ナルシストかと思つていた…」

『「巫山戯るなよ？」』

「そろそろ夕方か…」

『「無視かよ…」』

「買い物行つてくるけど、欲しい物あるか?」

「」の世界の主導権」

「」めんよ。お兄ちゃんはそれを『』えてあげる」は出来ない…」

「いや、冗談だから」

「じゃ、適当に買つてへるわ」

「いつてらつしゃーい」

「行つてねめす」

「……おこ、早く出るよ」

「やつぱ暑すぎて無理」

「それじゃあいつ行くんだよ」

「深夜に『』」

「もういいよ…」

「つかし、」の異常な暑れはこつまで続くんだひつな…」

・1・

「2 × 2 × 180 / 360 は… 何?」

「ちょっと… それ、 中学2年でも答えられるんだけど…」

答えられれば苦労なんてしないんだよ。
大体、分からぬものは分からぬし。 数学は20点以上取つたことない。

「そんな問題も答えられないなんて…。 どうしてそんなんで高校入
れたの?」

「”勘”だ。 全問4択問題だつたからな。 オール満点だつた」

そのせいで何故か首席で入学してしまつた。

そして入学後はこのザマ…。 俺の運はここにござりという正念場でしか発
揮されないらしい。

通常のテストでは15点がいいところなのだが、 全国統一模試等で
は必ずBest 5以内にはランクインする。

「運がバカみたいに強い… まあ 実際バカだけど。 その運を何かに使
えないの?」

「一度だけ麻雀をしたんだが、 1時間で40万儲かった。 あの時は
ビックリした」

「それ、 どうやつたの?」

「1時間で半荘70回したんだが、毎回親スタートで配牌聴牌での
第一次モで自摸和了つて天和だった」

つまりは、一度も一向聴にならず、一順目の一本場で全員が跳んだ
わけだ。

「1時間に半荘70回って…」
「俺もビックリしたさ。速攻で役満和了るんだから。まあ、そのせ
いで友達が居なくなつたけど」

ちなみに、高校1年の時の旧友だ。
旧友とよんでいいのか分からんが。

「それで商売すりやいいじやん
「…その発想は無かつた」
「いや、冗談だから。賭博は違法だから」
「そういうや、昔から運だけはいいんだよな。何でだろ
「パパの運を引き継いだんじゃない？」
「未来！今ソイツの名を出すな！」

今ソイツの名を出せば、俺があのマダ男の血を引いてることになるんだから！

「それは仕方ない。少なからずアンタはパパの子だから。パパとママがやつてアンタが生まれてきたのは事実。それを否定しちゃ、アンタと私は兄妹ではないことになるから。…あ！それでいいんだ！よし！今日からアンタと私は兄妹じゃない！おｋ？」
「Ｚｏ！そいつは駄目だ！そんなことになっちゃ、俺のワイルドラインが断たれるも同じだ！だつて権力はお前の方が強いから！」
「どうにかしてワイルドライスを追い出す方法は…」

マズい。

この怨妹（造語）が何かしでかす前に対策を考えないと。
せめて金があれば…。

「お金か…」

「いくらかならあげてもいいけど？」

「『返してよ！お兄ちゃんのバカつ！にわわるうう…』とか言わな
いよな？」

「うん、それよりお前は私の事を普段そんな目で見てるのか」の
蛆虫口リコン野郎

「残念だな未来よ。お前にそのようなことは微塵も一期待していな
い」

「そうか。それは光榮だ」

許してもらえてなによりだ。

少しだけお巫山戯が過ぎた。

てか、兄妹内でこんな会話が繰り広げられてるって普通じゃないよ
な？

「よし。ではいくらだ？」

「30万前後でどうか」

「フツフツフ…お主も悪よのう…」

「……そのテンション飽きたんだけど」

「そうか。わかつた、止める。でもそんな大金どこにあるんだ？」

「私の机の百科事典の箱の中に150万円が」

「口本かよ！」と突っ込みたいが、殺されるので押し殺した。
でも、また何でそんなところに。
しかも肝心の百科事典はどこに行つたんだ。

「何か言つた？」

「い、いや、何も」

「それじゃ、待つてて」

「おう

・2・

「はい、30万円」

「どーも。この機会に銀行口座の開設しとくか？」

「うーん、そうじようか

「じゃ、行つてくるわ

「手ぶらで大丈夫なの？」

「手ブラ！？お前、何て事言つてんだ！」

「五月蠅い黙れセクハラ腐れド変態

あ、その包丁は何処から取り出した！？

お前のポケットは四次元か！

このままじゃ俺が裸過ぎる

何か…あ…靴籠！

これなら包丁より断然リーチが長い！

「冗談だつて！…ちょっと…お前がその氣なら」いつも靴籠で応戦

だ！」

「どうつ！」

「包丁は投げるものじゃない！それじゃ、行つてきます！」

「あ、そうだ。ちょっとまって

何？

殺すのだけは勘弁してよ。

傷害事件には関わりたくないから。

「多分だけど、ネットでやつた方が得だと想つ。ポイントが付いたりするし」

「便利な」時世になつたもんだ。じゃあそつちでやるよ

ウイーン…ガガガ…

「そういうえば、最近パソコン使つてないな…。ネット料金とかは知らない間に発生してんのかな」

「知らない。あ、pass^{パスワード}入力画面でたわよ。早く打つてよ

…暫^{しば}しの沈黙。

—Now loading . . . (* X — X)

なつるーでんぐ

「何で知らねーんだよおおおおお！（。皿。）」
「うつちの台詞^{だいし}じゃああああああああ！（。 。 ）」

…ハツ！

いかんいかん。取り乱してしまつた。

それもこれもあのクソ親父のせいなんだが。

「今日は、あきらめよう？」

「うん、そうだね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7761m/>

未定一。

2010年11月11日12時01分発行